



上智大学創立 100周年
上智短期大学創立 40周年
上智社会福祉専門学校 50周年



ザビエル祭

No. 18

1. 上智大学と聖フランシスコ・ザビエル

上智大学は聖フランシスコ・ザビエルの「ミヤコに大学を」の宿願によって作られた大学である。ザビエルは1549年に日本にキリスト教布教のために来日した。そのことは日本人なら歴史で習うので誰でも知っている事実である。しかし、日本で大学を設立しようと念願していたことは少しザビエルの航跡をたどって見ないと見えてこない。鹿児島に上陸したザビエルは、日本人の聡明で好奇心の旺盛な、知的欲求の高いことに眼を見張り、できればキリスト教布教のために日本の首都に大学を作ろうとした。しかし当時の日本は戦国時代で、時の将軍や比叡山の僧侶にも会うことができず、失意のうちに日本滞在2年3ヶ月で去っていく。そして日本文化の源流を知るために中国を目指すが、1552年12月3日に中国本土を前に上川（サンシャン）島で死去する。しかし、ザビエルの蒔いた種は、長い禁教の歴史を経て大正時代になってようやく実を結ぶ。ザビエルと同じくイエズス会に日本での大学作りを託された3人の神父、ヨゼフ・ダールマン、アンリ・ブシェー、ジェームズ・ロックリフや初代学長となったヘルマン・ホフマン神父、3代学長土橋八千太神父などの尽力で、上智大学は1913年に



聖フランシスコ・ザビエル像(キリシタン文庫蔵)



下関に到着したザビエル(日本二十六聖人記念館蔵)

設立するのである。だが、戦前はザビエルの命日を大学の祝日としたり、全学休業にしたりした記録はない。12月3日のザビエルの祝日を大学の祝日としたのはいつなのか。

2. ザビエル祭はいつから？

2001年度のザビエル・ウィーク実行委員会(カトリック学生の会)の何人かの委員が、元上智学院理事長だったクラウス・ルーメル神父に聞いた話が記録として残っている。それによるとザビエル祭は1953年12月3日に、当時の学生部長ボッシュ神父の発案で「祈りの日にしよう」ということで、全学休業となり、カトリック研究会(カトリック学生の会の前身)が主催して、クルトゥルハイムで1日黙想を行った、とある。こうした黙想会が数年続いたとあるが、全学休業にしたとの正式な記録はない。

1959年にカトリック学生の会ができると、カトリックの精神を一般学生にも浸透させることを目的に1961年にザビエル週間を行いたいと発議し、11月27日から12月3日まで行われたが、内容についての記録はない。その後1966年にザビエル・ウィークとして、講演会を開催している。そして大学の行事として公式にザビエル祭として定着したのは1977年からであった。この年から学則に「聖ザビエルの祝日」と明記され、全学休業となった。

3. カトリック学生の会とザビエル・ウィーク

ザビエル祭あるいはザビエル・ウィークを実行してきたのは、主に上智大学カトリック学生の会である。最初の頃は、「聖フランシスコと日本人のこころのふれあい」「制度としての法王庁」などをテーマに講演会を行っていた。1978年はイエズス会士再渡来70周年にあたり、ザビエル祭で大規模なミサとパーティーが行われた。1980年にはシンポジウム「ザビエルの精神と現在の上智大学」、また学生サークル活動の拠点ホフマン・ホール完成記念パーティーなども開催されている。83年には、ケルン大司教区ヘフナー枢機卿の記念ミサなど、その時々行事を組み入れている。

その後は遠藤周作原作の映画「沈黙」「深い河」などの上映会、また上智大学のルーツである聖イグナチオ・デ・ロヨラの研究会、ザビエルの研究会など上智大学の建学の精神をたどることで、「他者のために生きる」ということがどのような意味を持つのかを一般の学生に知らせるウィークとなっている。

4. ザビエルのメッセージと上智大学建学の精神

ザビエルの東洋布教の動機は、マタイ福音書にある「全世界を自分のものにしても、自分の魂を失うならば何の益があるのか」という言葉であった。「ザビエル祭」は、ザビエルの精神を確認することで、大学の建学の精神を再確認することにもなっている。1982年に



カトリック活動として旧イグナチオ教会で行なったモーツァルトのレクイエム(1959年)



1957年頃のカトリック活動。学生の洗礼(写真上)
黙想するカトリック学生(写真下)



当時学長だった柳瀬睦男神父は、次のように述べている。「上智大学は、キリスト教的ヒューマニズムの教育理念を基盤にしています。これはザビエルの建学理想としているものです。私たち上智人は、ザビエルの精神を思い起こし、人生の価値、人生の目的とは何であるかを、いつも問いなおすことが大切であると思います。このザビエル祭にあたっては、私たちは、上智の建学の精神にたちもどり、心を新たにするとともに、全世界の物的、精神的に恵まれない人たちのためにすすんで奉仕しなければならぬと思います。」